



校長通信

空の飛び方

「こんな顔で」

11月初旬、奈良を訪れた際に、興福寺に安置されている旧山田寺の仏頭を見てきました。詩人の相田みつをさんは、この仏頭を見て、特別な思いを感じとられ、「こんな顔で」という詩を作られました。

宮沢賢治の詩にある

「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」というのは
 こんな顔の人をいうのだろうか
 この顔はかなしみに堪えた顔である
 くるしみに堪えた顔である
 人の世の様々な批判にじっと耐えた顔である
 そして ひとつも弁解しない顔である
 なんにも言いわけをしない顔である
 そしてまた どんなにくるしくても どんなにつらくても
 決して弱音を吐かない顔である
 絶対にぐちを言わない顔である
 そのかわり やらねばならぬことを
 ただ黙ってやってゆくという固い意志の顔である
 一番大事なものに一番大事ないのちをかけてゆく
 そういう毅然とした顔である
 この眼（まなこ）の深さを見るがいい
 深い眼の底にある さらに深い憂いを見るがいい
 弁解や言いわけばかりしている人間には この深い憂いはできない
 息子よ こんな顔で生きて欲しい
 娘よ こんな顔の若者とめぐりあってほしい



人は、何か問題が起こった時やうまく物事が進められない時に、その原因を回りの人や出来事のせいにすることがあります。友達が悪い、親が悪い、環境が悪い、社会が悪い、政治が悪いなど、自分以外にその要因を求めてしまいます。しかし、そうしている限り、自分の足りないところは見えてこないのです。見えてこなければ自分を変える努力を始める機会は決して訪れません。自分が変われば変えられる状況はたくさんあるはずですが、相田さんの詩からはそんなメッセージを読み取ることができます。また「この顔」が一番大事なものに一番大事ないのちをかけていく固い意志のある顔であると言っています。大きな志と謙虚な姿勢を持つことで、人の顔には、人間としての強さ、深さ、重厚感、円熟味が出てくるものなのです。

アメリカ合衆国第16代大統領リンカーンは「40過ぎたら自分の顔に責任を持って」という言葉を残していますが、これは、人間は年齢を重ねるとともに、その人の生き方、考え方、品格、知性などが顔に表れてくるので、顔に深みが刻まれ始める40歳を過ぎたら自分の顔に責任を持たなければならないという意味です。皆さんが、今から20年後の40歳を迎える頃に、相田さんがいうところの「こんな顔」になっていることを願っています。

